

令和4年度 第1回神戸市就学・教育支援委員会

議事要旨

- 1 開催日時 令和4年6月9日(木) 15時~17時
- 2 開催場所 神戸市総合教育センター601号室
- 3 出席委員 石倉委員長、中尾委員、高田委員、中西委員、川崎委員、西田委員、二宮委員、
オブザーバー 三瀬校長 榎本副課長

4 議事

- (1) 特別支援教育に関するあり方について
(事務局より資料1について説明)

●委員長

- ・盲学校の児童生徒数の減少について医療の立場からご意見いただきたい。

●委員

- ・未熟児で視力障害は減っているが、一つの障害だけでなく複数の障害をもつ子どもが増えている。視覚でなく他の支援学校に行くケースが多いのだと思う。

●委員

- ・以前に比べ強い視力障害の子どもは減っているが、未熟児網膜症など重症の子どもは一定数おり、また、遺伝性疾患などの病気で視覚を失う子どもも少なからずいる。
- ・子どもの数は減っているが、幼児の歩行訓練など、視覚の特別な教育があると思うので、教える側で広く受け継いでいかなければならない。
- ・ICT化が進み、弱視であっても普通校で学習を続けていける子どももいる。学校側の多様な対応により、普通校で学べる子どもが増えていると思う。
- ・盲学校へ行かないといけないような重度の子どもに対する教育と、地域校と迷うような子どもへの教育が、それぞれの特徴を、あるいは混ざって受けられるとよい。
- ・ある時は盲学校で専門性を、またある時はたくさんの子どものなかで社会性を身に着ける、両方の環境が得られるようにしていくのがよいのではないか。
- ・視覚障害の子どもが減っているのは、子ども全体が減っているのと同じであると思う。

●委員

- ・早産児の場合、肢体の問題を持っているとどうしても体幹のケアがメインになり、感覚機能のサポートが疎かになる。視力の問題は特別な教育、機器など必要性なサポートが必要。
- ・通級指導の問題で、通常の学級にいるときには受けられるが、特別支援学級に在籍していると利用できないということがある。
- ・障害の発生原因が、視覚がメインでなく他の障害が主たる障害になって、別の支援学校にいつているのではないか。

○事務局

- ・全国の盲学校の校長会の調査で、近年視覚障害者の大学進学が増加しており、視覚障害者に対する高等専門機関の門戸が開かれ、進学しやすくなっているという考察もある。

●委員

- ・教育実習で盲学校へ行ったが、生徒はほぼマンツーマンで指導を受けていた。
- ・それぞれの教員は点字や白杖指導など専門スキルを着任してから得るので時間がかかる。
- ・はり・きゅうの専門学校が大阪や神戸に増えており、成人はそちらに行くケースが多いのではないか。
- ・教員の質、専門性の担保が課題になる。

●委員

- ・特別支援の現場から見ると視覚に課題がある児童も増えていると感じる。
- ・物の空間認知・弁別ができない目の使い方の子どもが増えている。
- ・その子たちがどこに相談に行けばよいか、今は相談できる場が限られていると感じていた。ひとみ教室がそれに当たるのか。(事務局：ご明察のとおり)

●委員

- ・視力障害とは別に、発達障害や学習障害のある方で、検査では見えているがうまく処理できないといった「見え」の問題はあるかと思う。
- ・高次脳機能障害、小児、発達、療育あたりでの相談になるかと思う。眼科が窓口になることは難しい。

●委員

- ・学校教育は個の指導も大事だが、集団での指導も大事である。
- ・同じ年代の子どもたちと触れ合えるのかというと、今の盲学校の人数でそれが担保できるのかという問題が出てくる。
- ・兵庫県北部で小学校の統合が続いているが、子どもたちの通学区域が広がりバスで1時間かかるといった問題が出てきている。
- ・人数が少なくても専門的な指導を受けることで専門性を担保するのか、集団で子どもの心の教育を担保するのか。
- ・盲学校でブラインドサッカーの練習を見たが、先生とマンツーマンではたして生徒は楽しいのかと思った。

●委員

- ・事務局に質問であるが、地域校との交流、並行通園などの例はあるのか。

○事務局

- ・本人、保護者が希望すれば地域校交流もあるが、学期に数回が現状で、同じ年代での学びの場にはなっていない。学びを保証する観点は大事だと思っている。

●委員

- ・重度障害の方でも視覚障害を合併している方は多いが、医療的ケアや知的が重度であることに目が行きがちで視覚障害の評価が難しい。見えなくてどれだけ困っているかを周り

が気づけていないことがあるのかもしれない。肢体不自由の支援学校で視覚障害の教育がもう少し取り組めるとよいと感じた。

- ・盲学校では視覚障害に対する専門性は担保できるが、生徒と教員の数から、社会性が学びにくいことはあるだろうと思う。
- ・そういう意味で、通級や支援学校でも視覚に対するアプローチのできる先生に指導していただける時間が確保できればよいと思う。
- ・重度の方のリハビリを進める上で、どの程度見えていそうかの視覚の評価が十分できないまま進めているケースもあるので、もう少しきっちり支援者が評価をしよう、もっと知りたいと思いながら関わらないといけないと感じた。

●委員

- ・灘さくら支援学校の様に、一般校の横に支援学校等があるケースが多くある。盲学校も地域校にくっつけることにより交流ができるのではないか。マンツーマンで集団での生活ができていないより、周りがががやがやしている中で過ごすことも大事だと思う。
- ・大学では合理的配慮でボランティアを同伴させて授業を受けている生徒もいる。障害のない人と交流しやすくなっていると感じている。

●委員長

- ・事務局に質問であるが、生徒自身、保護者、先生はどう感じているのか。意見はあるのか。

○事務局

- ・盲学校のPTAで話す機会があった。専門性を大事にしてほしい、点字の分かる先生を育ててほしいというご意見をいただいた。一方で、同年代の子どもとの触れ合いも必要という気持ちを持っておられるのも分かった。子供たちにとって一番大事なことは何かということを考えていく必要がある。

●委員

- ・交流、あるいはセンター的機能の訪問を中心に行っているとか、地域校と隣接しているなど、全国的に見て素晴らしい試みや参考になる様な事例は調べているのか。

○事務局

- ・全盲の単一の生徒と共に学ぶような事例はなかなか出てこない。

●委員

- ・千葉の四街道特別支援学校は平成19年の特別支援学校への移行時に、4障害を受け入れて始まった。自閉症の子どもたちがいる中で、視覚障害の子供たちに対する静寂さの担保が難しかったと聞いている。
- ・盲学校も隣の湊小学校とある程度交流できていると思うが、交流という意味では最初に取り組んだのが京都の八幡支援学校で、隣の八幡高等学校と廊下が繋がっており行き来している。
- ・視覚障害に特化している例としては、兵庫県でも定期的に県立と市立が年に何回かの行事で交流している。

●オブザーバー

- ・マンツーマンになると先生が支援しすぎてしまうことがある。集団で一緒に学ぶことで心が充実していくと思う。

●オブザーバー

- ・県特別支援でも、適正な集団の確保は重要であると考えている。専攻科は様々な実習があるが、少人数だと実習できないなど様々な課題が考えられる。保健医療課の専門性が実際の社会のニーズ、生徒本人のニーズに合っているかも検討しなければならない。

●委員長

本日いただいたご意見をまとめさせていただく。

- ・学校教育であるから、集団性の担保が大事で、交流教育を深めていく必要がある。一方で、その際には静かな環境の保証といった環境整備も必要である。その兼ね合いが少し難しいところである。
- ・ひとみ教室もそうだが、盲からロービジョンまで研修も含め、教員の専門性をどう担保していくかが大事である。
- ・保護者、本人、教員の思いや意見を踏まえていくため、話を聞く機会、時間を取ることが必要である。